この本読むべし――自薦式ブックレビュー

滝川一廣著『学校へ行く意味・休む意味』

小林隆児
（西南学院大学）

リレー連載（8）

スクールカウンセラーを主な読書層とする本誌にとって，ここで取り上げる書ほど適切なものは少ないかもしれない。今年出版された滝川一廣著『学校へ行く意味・休む意味』である。出版社によれば，本書は社会科学の視点から教育問題を考えてもらうための入門シリーズの一貫として出版したものだという。サブタイトル「不登校ってなんだろう？」にもうかがわれるように，本書は現在不登校で悩んでいる当事者やその家族を相手に，「学校に行く意味」について共に考えてみようと，優しく語りかけるような文体で論じられている不登校論である。しかし，だからといってけっして内容が浅いわけではない。「学校に行く意味」のみならず，「働く意味」や「生きる意味」をも，ともに考えてみようと語りかける人生論ともいうことができるほどである。著者は精神科医であるが，単なる不登校の治療論を論じているわけではなく，不登校問題を主に社会学的視点からとらえていこうとするもので，本書の出版意図もそこにあるわけである。

今日，毎日のように起こる社会的問題に対して，「熱しやすく冷めやすい国民性」を反映するように，マスメディアは事件直後センセーショナルに報道し，短絡的な問題解決の提言をする。しかし，他の事件が起こると，すぐに前の事件は忘れ去られてしまう。そんな繰り返しのわが国の現状を嘆き，物事の本質をしっかり見据えることが大切であると著者は強調する。そのために「学校に行く意味と休む意味」を考える上で必要な視点を，第一に，歴史をふかくさかのぼること，第二に，社会とのつながりを深くとらえること，第三に，こころの世界を深くとらえること，これらを三本の柱にしながら，相互にどのように絡み合いながら展開しているかを，懇切丁寧に，行きつ戻りつしながら分かりやすく論じている。

不登校問題がいかに裾野の広い問題であるかは，本書の冒頭で古代ギリシャ時代のソクラテス，プラトンを登場させていることからも窺い知ることができる。学校で学問をするということが歴史的にどのようなかたちで始まったのかを解説することから始め，それが今日までさまざまなかたちで影を落としてわれわれの意識に深く入り込んでいることを説き明かす。読者はつい吸い込まれるようにして読み進めることになる。

本書の前半部の大半は，そのような歴史学的，社会学的な切り口から教育問題を振り返ることに割いている。具体的には，（第２章）教育とは何か，（第３章）近代のはじまりと公教育の誕生，（第４章）日本公教育のはじまり，（第５章）学校の聖性，（第６章）戦後の学校長欠率の推移，で構成されている。

その後，本書のテーマである不登校論に入り，（第７章）不登校はどうはじまったか，（第８章）戦後における学校教育，（第９章）不登校への取りくみのはじまり，（第 10 章）不登校をめぐる百家争鳴，（第 11 章）不登校はなぜ増えてきたのか，そして最後の（第 12 章）学校へ行く意味，休み意味，へとつながっていく。

最後まで著者とともに考えながら，一気に読み進めることができるのは，本書の出来上がっていった過程を聞けば，読者もなるほどと思うに違いない。評者が著者から直接聞いたところによると，本書は著者がひとりで思索に耽りながら執筆していったものではなく，編集者が頻回に著者との打ち合わせを繰り返す中で生まれたものだという。編集者が聞き手になることで，著者も彼に語りかけるようにして文章を推敲していったのであろう。それが本書の文体によく示されている。このような書の作り方は，著者にとってはこれが初めてではない。フリージャーナリスト佐藤幹夫氏が聞き手となって生まれた著者の『「こころ」はどこで壊れるか』を初めとする洋泉社シリーズものがすでによく知られている。著者の語り口調は穏やかであるため，発言内容も一見するとソフトに思われがちであるが，その内実は極めて過激である。本書も同様である。目先の問題のみに囚われやすい臨床従事者に対する厳しい目を随所に感じるのは評者のみではなかろうと思う。

著者が臨床において理解を深める際にとっている基本的態度は，人間は社会的存在として，社会（共同性）を生きているという人間理解である。人間にとって「生きる」とは，ただ命をたもつことではなく，共同的なかかわりを結びあい，みんなと世界を分かちあうことだという。ここに著者の人間観が端的に示されている。本書に一貫して流れているこの人間観が本書を単に「学校に行く意味」を論じた不登校論ではなく，「働く意味」や「生きる意味」をも語りかける人生論だと思わせる理由がある。

最後に，本書を評者が強く勧める最大の理由を述べて筆を擱くことにしよう。それは臨床問題を考えるに当たって臨床家に身につけて欲しい基本となる考え方に

ついてである。さまざまな現象をとらえて理解する際に，著者が最も大事にしているのは，その現象を突き動かしているものはなにか，その動因として何が働いているかを考えるということである。その意味でも本書は，物事の本質を見失うことなく考え抜くにはどうしたらよいか，思考の原理を具体的な形で分かりやすく示してくれている書ではないかと思う。

200字レビュー

子育て支援の電話相談を2001年より立ち上げ運営している東京臨床心理士会による『子育て電話相談の実際』（創元社）が刊行された。電話相談には，通常の面接とは異なる「聴き方」があるが，会では，よりよく「聴く」ためのトレーニングプログラムまで開発したという。聴くことのプロである臨床心理士らがたどり着いた電話相談のエッセンスとはどういうものなのか？子育て支援にかかわる多くの専門職・ボランティアの方たちに向けて書かれた電話相談の入門書。

200字レビュー

年齢に応じた生活スキルを身につけることを第一に，アスペルガー症候群の小中学生のために書かれた『アスペルガー症候群のある子どものための新キャリア教育』（本田秀夫・日戸由刈編，金子書房）が刊行された。キャリア教育と言われると，一瞬，青年期や大人向けの本かなと思うが，子どものためというのが興味深い。確かに，「挨拶」などの普段の生活スキルは社会に出てからのスキルとまったく同じものである。家庭と学校でできることを啓発する編者らの方向性は必読のものであろう。

200字レビュー

子どもへの性暴力は看過できぬ問題であり，社会全体で考えていかねばならぬ課題である。藤森和美・野坂祐子編『子どもへの性暴力』（誠信書房）は，まさにその核心をつく本である。臨床心理だけでなく，精神科医や弁護士，児童心理司らによって書かれたこの本は，目をそむけたくなってしまうこの現実に立ち向かう勇気をくれそうだ。正しい知識とリソースを知れば，大変な世界にたたずむ子どもたちに手が差し伸べられるだろう。学校関係者はぜひ読んでおきたい。

200字レビュー

瞑想と聞くと妖しげだが，アメリカのセラピー業界では人気が高いとか，CBTの一環となっているか，マインドフルネスなどと言われると，がぜん，興味が湧いてくる。J・カバットジン著『マインドフルネス瞑想ガイド』（春木豊・菅村玄二編訳，北大路書房）は，マインドフルネス瞑想法の創始者による4枚組のCDつきの入門書である。カバットジンは分子生物学者でもあり，マサチューセッツ大学医学部名誉教授でもある（これで妖しさは半減しただろうか）。興味深い1冊。

200字レビュー

緊張して眠れない！というのはよくあること。どきどきで試合や試験がうまくいかなかったら，今までの練習が……。冨永良喜・山中寛 作，小川香織絵『本番によわいわん太』（遠見書房）は，そんなときのために学んでおくストレスマネジメント教育の一環として生まれた絵本。半分は絵本で，もう半分は心理教育の教材となっている。スクールカウンセラーの方が授業をする機会も多い。こういうのを使ってみたらどうでしょうか？